

「視線」は家族の何を語るか

—家族紹介映像、FACESⅢ、FIT、セルフモニタリング尺度を用いた探索的検討—

小 沢 哲 史

本研究は、人が自らの家族を語る時に、その視線行動のあり方が、家族の関係性の認知や性格特性などと関連しているのかどうかを探索的に検討した。研究協力者は短期大学生40名であった。データとして、(a) 学生が自らの家族について話す映像、(b) 家族機能測定尺度、(c) 家族イメージ法、(d) セルフモニタリング尺度を用いた。映像から、(1) カメラを見て話す群、(2) 相手の映像を見て話す群、(3) 話している間に、視線が定まらない群、(4) 画面から視線を逸らせたまま話す群の4群に分けた。信頼性は不十分であるが、注目すべき結果として、(3) の視線が定まらない群 ($n = 6$) において、家族機能尺度における「バランス群」がおらず、「極端群 ($n = 4$)」と「中間群 ($n = 2$)」の2群にだけ分類された。

An Investigation of What Eye Movements Tell about the Family : using video images, FACESⅢ, FIT and SMS

Tetsushi Ozawa

The correlation between eye movement when talking about the family and personality or cognition of family relationships was investigated. Junior college students ($n = 40$) were investigated using : (a) video images of students as they talked about their family ; (b) Family adaptability and cohesion evaluation scales Ⅲ (FACES Ⅲ); (c) Family image test (FIT) and (d) self-monitoring scale (SMS). The participants were divided into four groups based on recorded images of eye movements when participants talked about their family : (1) participants staring at the video camera ; (2) participants seeing the companion's images ; (3) participants not fixing their eyes and (4) participants diverting their eyes from the monitor. Significant results were seen in group (3) ($n = 6$), examined by Method (b), in which the participants divided into two clear groups, "extremes ($n = 4$)" and "intermediates ($n = 2$)" with no participants classified as "in between".

Received Nov. 18, 2005

はじめに

「目は口ほどにものを言う」と言われる。確かに、私たちは他者の視線から何事かを感じ、自らの行動の決定や調整を行っていることがある。しかし、'口'に相当する言語に辞書や教科書という相対的に明確な典拠があり、幼少時から教育されることはあっても、'目'に相当する視線コミュニケーションに関しては辞書や教科書に基づいて教育されることはないのである。すなわちそこに十分な拠り所がないにもかかわらず、私たちは視線で語り、視線を聞いてしまっていることになる。日常的な対人関係だけでなく、一生の方向を決める取調室や面接などにおいてさえ、

視線コミュニケーションのあり方が時に影響力を持ってしまう。本論文では、このように‘あいまい’でありながら重要な視線コミュニケーションとそれに影響する可能性のある要因のひとつとしての家族について議論し、さらに実証的データを検討する。

【背景と目的】

<背景1：視線コミュニケーション>

目は、他の生物種にも備わっているが、何が人間において特に異なると言えるのだろうか。その特異性を明らかにするために、動物行動学者ティンバーゲン (Tinbergen) の4つの要因という観点から捉えてみたい：すなわち、1. その行動が進化の歴史において、どのように実装されてきたのか (系統進化要因)、2. その行動には種の保存において、どのような利益があるのか (究極要因)、3. その行動は、その生物の幼体から成体に成長するにつれてどのように獲得されるのか (発達要因)、4. その行動はいかに生起するのか (至近要因) の4つである。

まず、系統進化要因として、ヒトの目は、他の生物種と比較して強膜 (白目) の範囲が大きく、その結果、瞳孔や虹彩とのコントラストが高いことが知られている。このことによって、ヒトという種は視線方向の検出が特に容易となっているのである (Kobayashi & Koshima, 1997)。視線方向を検出する、すなわち視線を読むということは、現前する状況を踏まえながら次の瞬間の他者の動きの予測を可能としようとしたものである。したがって、それは目には見えない意図ないし心を読むということですらありうる。すなわち、人間の目は、ヒトという種における「心の窓」という役割に基づいて進化したものと考えられるのである (e.g., ハンフリー, 1993)。つまり、視線行動の究極要因とは、言語能力など、他の人間の特質もそうだが、人間という種が、種の保存を、高度の分業や協業によって行うということを指している。

それでは次に、発達要因として、どのように個々の個体に根付いていくのだろうか。この要因は後に詳述するように、本研究の焦点でもある。私たちの多くは、ある特定の文化の中に成長・発達する。そこで、成長・発達にしたがって、その文化圏の視線コミュニケーションのスタイルを取り入れることとなる。例えば、アラブ文化圏やラテン文化圏の人々においては、会話中に相手の目を正面から見据えることが多く、逆に日本文化圏においては、相手の目を見る頻度は必ずしも多くないばかりか、視線は時に攻撃的に感じられるため、対人恐怖の中核症状のひとつとなっている (木村, 1982)。

また、私たちの多くは、ある特定の家庭に育つ。そこから、その親の養育の種々の側面からも、視線コミュニケーションのあり方が決まってくると言える。例えば、Walden & Knieps (1996) は、未だ言語の不十分な乳幼児が、視線を向けた時に親がそれをコミュニケーション開始の信号として捉えるか否かを、その子どもの視線行動の発達の要因としており、現実には子どもの視線を用いた社会的情報収集行動には違いが生じる。また、成人を対象とした研究としては Hetherington (1972) がある。この研究においては、離婚または死によって父親と別れた青年期の女性の面接者に対する視線行動の違いが検討されており、離婚で父と別れた女性の凝視が長く、死別した女性のそれが短いことを見出し、家族の関係性が視線行動に影響を与えているらしい。

なお、発達要因であるのか系統進化要因であるのかは、必ずしも明確ではないが、視線行動に関して性差を指摘する研究もある。一般に同性と会話する場合、女性の方が男性に比べて相手の顔を見ることが多い。しかし、異性間で会話する場合には、男性が女性を見る方が多くなるので

ある (Argyle & Ingham, 1972)。

最後に至近要因についてもいくつか述べておきたい。Argyle & Cook (1976)、Kendon (1967) などの会話における視線行動の役割に関する研究を、多くの例外を割愛して概略を述べる。(1) 人は必ずしもお互いに見つめ合って話し合うわけではなく、どちらかといえば、話し手が相手の目、聞き手は相手の口元に視点を置きがちである。(2) 話が終盤を迎えると話し手は、長く聞き手を見つめる。逆に短く見つめるときは、話の内容・語句について強調したい時である。(3) 話し手が、話の終わりにさしかかっても、聞き手が話し手を見つめ続けるときには、さらに話し手が話すことを予想するか、あるいは望んでおり、逆に逸らしたならば、話す-聞くの役割交替を予期しているか、あるいは不賛成・無関心の現れである。

また、互いの距離も関係する。人は近すぎても、遠すぎても視線を交錯させない (Argyle & Dean, 1965; Argyle & Ingham, 1972; Goffman, 1963)。さらに、性格や精神疾患、及びお互いの親密性も関係することが知られている。例えば、外向的な者は、より相手を多く見 (Kendon & Cook, 1969)、統合失調症やうつ病では見ない (Hinchliffe, Lancashir & Roberts, 1971)。そして親密なカップルほどお互いを見つめる (Rubin, 1970)。

ただし、ここまで紹介した研究群は圧倒的に西欧文化圏の研究協力者を対象としており、日本人を対象とした追試は十分に行われていないことには留意する必要がある。

<背景2：家族>

近年、日本社会においても、少年犯罪や児童虐待などへの関心などと同期して、家族に対する不安が高まっており、また家族をひとつの価値として考える傾向が強まっている。しかしながら、例えば、「家族が大切だから、家族を大切にしよう。そうすれば家族の問題はなくなる。」というような直線的因果律が必ずしも現実に結び付かず、むしろ裏目に出ることが知られている。客観的に問題があるとされる家庭であっても、家族の一人ひとは、「家族のために…」と献身的な努力をしていることがしばしばある。このような家族のパラドックスを鑑みて、例えば、家族療法の第一人者のひとりであるホフマン (Hoffman, 1981) や亀口 (2000) の考えを筆者なりにまとめ直してみると、家族療法に独特な発想とは、(1) 家族を理解するためには、直線的な因果律だけではなく、双方向的に因果を捉えるということ、(2) 問題 (症状) の否定的意味だけではなく、全体的な相補関係の中における肯定的意味に注目すべきであること、(3) 個人の防衛的心理状態を捨て去ることを必ずしも目標とするのではなく、防衛的ふるまいをひとつのコミュニケーション様式として捉えること、(4) 不安や変化に耐える強い構造を作る代わりに、生活における一種の原動力として利用すること等を挙げることができる。

このような認識の方法は、必ずしもわかりやすいとは言えないが、次第に (同時多発的に) 子どもに関わる現場関係者にも、(その質と程度は様々であろうと思われるが) 広がってきていると言える。例えば、子どもが問題行動を起こした時に、まず、良い悪いという価値付けをいったん外して見ること、そして、問題行動の理解の枠組みを彼または彼女を含む家族全体の関係性、あるいは家族と地域社会の関係性に求めていこうとするといったことである。

同様に、直線的因果律を仮定できない家族のあり方を捉えようと試みた Olson の円環理論を挙げることができる。家族凝集性と家族柔軟性という2つの概念¹⁾を想定したオルソンら (Olson, Sprenkle & Russel, 1979) も、これらを決して右肩上がりの1次関数のように高いほど良いものとは考えなかった。いわば「過ぎたるは及ばざるが如し」という発想において理論構築したの

である（カープリニア仮説）。家族の絆・結びつきの強さとも言うべき家族凝集性については、絆が強いに越したことはないと考えられる向きもあるが、Olsonらは、低すぎて問題が生じやすいのはもちろんのこと、高すぎるのも良くない（例えば、家族の密着が問題行動の誘因となるある種の‘息苦しさ’を産み出す）と考えた。また、家族に起こる様々な危機に対して、家族メンバーが時に役割を交代しながら解決にあたる程度を指す家族柔軟性についても、それが、硬直している場合に問題が起こりやすいのはもちろんのこと、柔軟すぎても、そこに問題解決の枠組みがなく、やはり危機を乗り越えにくいと考えたのである。

このように家族心理学の発想は、現代社会に受け入れられつつあるが、これらの発想を十分に裏づける科学的検証が行われてきたとは言いがたい。同じく人を対象としながらも、（1）個人を念頭においた従来の心理学的発想に適合しない部分が多いこと、（2）実証的なデータを採るにしても家族は個人より測定しにくい要因を含みがちであること、さらには、（3）プライベートな性質を強く帯びていることなどがあいまって、なかなか十分なデータが収集されず、現在でも、関心の高さに匹敵するような証拠が集められているとは言いがたい。

<本研究の目的>

一般に、自らが成育した家族が、個々人の認知、性格、精神的健康、配偶者選択、職業選択、生活スタイル等々に大きな影響を及ぼすことが容易に想像できる。この中で特に精神疾患の生起に家族が関連しているという見方があり、具体的に、統合失調症（e.g., レイン・エスターソン, 1972）、抑うつ感（e.g., 西出・夏野, 1997）、摂食障害、アルコール依存症、全般的健康度（e.g., 増田・山中・武井・平川・志村・古賀・鄭, 2004）の臨床像との関連で要因としてとりあげられている。そこでは、家族が視線行動に与える影響を主たるテーマとすることはないが、心理臨床家にとって、クライアントの視線は、面接のプロセスの中での行動観察上の関心事のひとつとされている。実際、面接記録においても、視線の不自然さはしばしば記述されている。そこで、本研究においては、家族関係が視線行動とどの程度関連しているのかを（探索的に）検討することを主たる目的とする。

しかしながら、その因果関係を具体的に検証しようという研究はあまりない。あえて、関連する事項を挙げるとするならば、被虐待児の臨床家の間では、家族病理としての虐待が児の「凍り付くような凝視」として現れていることを指摘する向きがある。また、視線行動を原因（のひとつ）として捉える記述として、レインとエスターソン（1972）の報告では、統合失調症患者の家族がやりとりする‘奇妙な’目配せや視線交錯がある。また、小沢（2002）、小沢（2005）では、親の養育信念（自律期待）が現実に、養育者から子どもの視線への意味づけに影響し、さらには、1歳半の子どもの刺激に対するふるまいにも影響を与えることを立証している。さらにすでに述べた Hetherington（1972）を挙げることもできよう。

このように、現実に視線に意味があると感じられながらも、研究データの蓄積が不十分であるのは、ひとつには、関心の単位が個々の病理現象であるためであろう。また、すでに述べたように心理臨床の現場や家族は密室性が高く、そこに科学的検証のメスを入れにくいこともあろう。さらに言えば、一瞬のうちに移り変わる視線（映像）をデータとすること自体の測定コストが大変なものであったのである。

このような状況において、客観的研究を行っていくためには、心理学者が、特に臨床群とは分類されていない協力者を得て徐々に行っていくのがひとつの途であると考えられる。本研究では、

このような家族関係と子どものコミュニケーションスタイルの関係が、青年期においても、何らかの形で発見できるのかどうかを検討する。本研究は、探索的な側面を持つため、具体的な変数間の仮説を定めず、単に「視線コミュニケーションのスタイルは、家族の何らかの側面と関連する」という仮説を検討していくものとする。

<本研究において取り上げる測度>

本研究においては、家族紹介映像、家族機能測定尺度、家族イメージ法、セルフモニタリング尺度を測度として取り上げる。以下に各測度の概要を示す。

[家族紹介映像]

本研究において実証性を高めるための重要なポイントとして、映像を介した対面状況（いわゆるテレビ会議状況）を用いた。これによって、視線方向の同定がより容易になり、また、保存可能な映像データとして実証的に検討できることとした。

また、映像は、自らの家族について語る場面とした。実証的に、テーマを統一しておくのが望ましいだけでなく、自らの家族について語る場面というのは、心理療法の場面から取調室まで重要な場面で生じ、応用の可能性が高いためである。

表1 家族機能測定尺度の質問項目

あなたの家族の現在の様子についておたずねします。次の各項目について、最もよくあてはまると思うところに、○をつけてください。

1. 私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。
2. 私の家族では、問題の解決には子供の意見も聞いている。
3. 家族は、それぞれの友人を気に入っている。
4. 私の家族は、子供の言い分も聞いてしつけをしている。
5. 私の家族は、みんなで何かをするのが好きである。
6. 家族を引っばっていく者（リーダー）は、状況に応じて変わる。
7. 家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている。
8. 私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を変えている。
9. 私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。
10. 私の家族は、叱り方について親と子で話し合う。
11. 私の家族は、お互いに密着している。
12. 私の家族では、子供が自主的に物事を決めている。
13. 家族で何かをする時は、みんなでやる。
14. 家族の決まりは、必要に応じて変わる。
15. 私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。
16. 私の家族では、家事・用事は、必要に応じて交代する。
17. 私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。
18. 私の家族では、みんなを引っ張っていく者（リーダー）が決まっている。
19. 家族がまとまっていることは、とても大切である。
20. 私の家族では、誰がどの家事・用事をするか決まっている。

〔家族機能測定尺度〕

草田・岡堂（1993）による家族機能測定尺度（Family Adaptability and Cohesion Evaluation ScalesⅢ：FACESⅢ 日本語版）は、すでに述べたOlsonらの円環理論に基づくものである（表1）。

この尺度は、現在、調査研究及び臨床場面における鑑別手がかりとして、最も成果を挙げていると考えられているものである（草田，1995）。すでに述べた家族凝集性と家族柔軟性の2つの下位尺度からなり、それぞれ平均値及び1標準偏差を区切りとして、4つのサブタイプを仮定する。すなわち、得点が低い場合から順番に、家族凝集性については、「遊離」「分離」「結合」「膠着」であり、家族柔軟性については、「硬直」「構造化」「柔軟」「無秩序」である。このうち、極端とされる「遊離」、「膠着」と「硬直」、「無秩序」を双方の下位尺度に含む者を「極端群」、一方にだけ含む者を「中間群」、含まない者を「バランス群」と分類した（図1；Olson, McCabbin, Larsen, Muxen & Wilson, 1985；草田，1995）。この尺度による弁別的成果として、例えば、アルコール依存症患者のいる家庭とない家庭の比較（Olson et al., 1985）、性犯罪者のいる家庭とない家庭の比較（Carnes, 1987）において、いずれも後者に比較して前者の家庭に「極端群」が多いことが報告され、鑑別及びより適切な処遇に利用できる可能性が示されている²⁾。

〔家族イメージ法〕

個々人において、自らが成育した家族が必ずしも、家族機能測定尺度のような質問紙によってのみ捉えられるとは限らない。そこで、さらに家族についての情報を得るため、家族イメージ法（Family Image Test：FIT；亀口，2003）という簡便な図式投影法を用いることとした。この

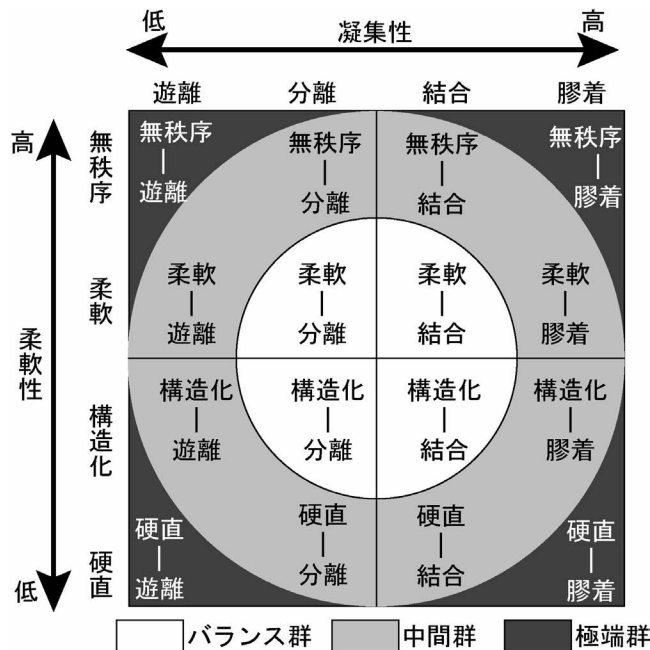


図1 円環モデル（Olson et al., 1985）

心理テストは、特に家族成員間の違いや、検査間隔による違いなどが、専門家でなくとも視覚的イメージとして、一目で捉えられることから、実際の家族療法の現場で利用されている。また、家族機能尺度との間で相関があり、基準関連妥当性が認められている（柴崎，2000）。本研究においても、より豊富な情報を得るために用いることとした。

[セルフモニタリング尺度]

さらに、家族に関わる変数に加えて視線行動を含むコミュニケーション行動に影響を与えると考えられる他の変数についても収集し、視線行動との関連を見ておくこととした。そこで本研究においては、セルフモニタリング尺度（岩淵・田中・中里，1982）を用いることとした（表2）。セルフモニタリングとは、対人場面において、状況に応じて自己の表出行動をコントロールしようという傾向を言う（Snyder，1974）。多くのパーソナリティ測定尺度の中でも、表出行動、すなわち実際のコミュニケーション行動に関連性を持つ尺度として考案されたため、現実の視線行動を対象とする本研究に適していると考えられる。

表2 セルフモニタリング尺度の質問項目

<p>以下にいくつかの質問があります。自分に最もあてはまるところに○印をつけてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人の行動をまねるのは苦手だ。 2. 自分の気持ちや、考え・信じていることを、行動にそのまま表す。 3. パーティや集まりで、他の人が気に入るようなことを、言ったりしたりしようとはしない。 4. 確信をもっていることしか主張できない。 5. あまり詳しく知らないトピック（話題）でも、即興の（アドリブで）スピーチができる。 6. 自分を印象づけたり、他の人を楽しませようとして、演技することがある。 7. いろんな場面でどうふるまっていかわからないとき、他の人の行動を見てヒントにする。 8. たぶん、良い役者（俳優・女優）になれるだろう。 9. 映画や本・音楽などを選ぶとき、友人のアドバイスをめったに必要としない。 10. 実際以上に感動しているかのようにふるまうことがある。 11. 喜劇を見ているとき、1人よりみんなと一緒にの方がよく笑う。 12. グループの中で、めったに注目の的にならない。 13. 状況や相手が異なれば、自分も違うようにふるまうことがよくある。 14. 他の人に、自分に好意をもたせるのが、特別上手な方ではない。 15. 本当は楽しくなくても、楽しそうにふるまうことがよくある。 16. 私は、常に見かけのままの人間というわけではない。 17. 人を喜ばせたり、人に気に入ってもらおうとして、自分の意見やふるまい方を変えたりしない。 18. 自分は、エンターテイナーであると思ったことがある。 19. 仲良くやっていたり、好かれたりするために、他の人が自分に望んでいることをする方だ。 20. これまでに、ジェスチャーや即興の芝居のようなゲームでうまくできたためしがない。 21. いろいろな人や状況にあわせて、自分の行動を変えていくのは苦手だ。 22. パーティでは、冗談を言ったり、話したりするのは、他の人に任せて、自分は黙っている方だ。 23. 人前では、きまりが悪くて（なんとなく緊張したり照れたりしてしまって）思うように自分を出せない。 24. よかれと思えば、相手の目を見て、真面目な顔をしながら、うそをつくことができる。 25. 本当はきれいな相手でも表面的にはうまく付き合っていける。
--

【方 法】

<研究協力者>

短期大学生40名（女性37名、
男性3名）

<測定手続き>

(1) 家族紹介映像

実験室（筆者の教員室）の
テーブルにおいて、真正面から
向かい合うようにディスプレイは
配置されている（図2）。仕切り
板によって、カメラを介さず
に直接互いの顔を見ることは
できない。紹介する相手は、
友人または実験者である。

ディスプレイには、右に相手
の映像、左下に自分の映像を
配置した（図3）。相手の映像
と比べて自分の映像は暗く
小さい。

教示：家族の各成員について
（協力者本人のことは含め
ても含めなくとも良い）、一
言ずつ述べていくこと。」

(2) 家族機能測定尺度

家族紹介映像の撮影後に、記入してもらった。全20項目、各5件法（「まったくない」から「いつもある」まで）。

(3) [家族イメージ法]（亀口，2003）

家族に対するイメージを高めるため、家族紹介映像を撮影する前に行った。〈1〉家族成員ひとりひとりのパワー（発言力、影響力、元気の良さなど）をシールの色の濃さで決める（5段階）。〈2〉用紙の枠の中にシールの向き（鼻を示す△マークがある）を考えながら、貼ることで配置し、どのシールがどの家族成員なのかを書き込む。〈3〉家族成員間の個々のつながりが「強い（太線シール）」、「ある（実線シール）」、「わからない（点線シール）」のうちどれかを考えて貼る（図4）。

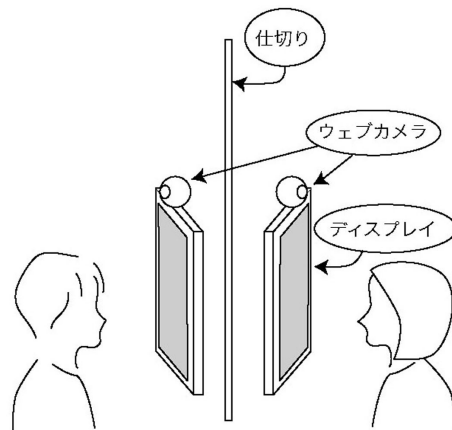


図2 研究の状況（ただし、ディスプレイは互いに平行に配置）

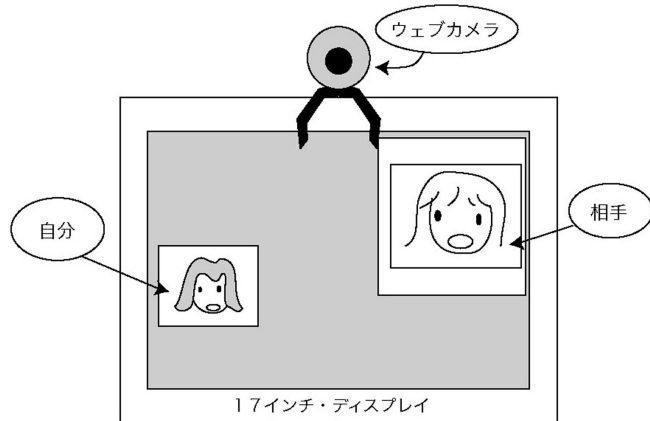


図3 ディスプレイ上の映像配置

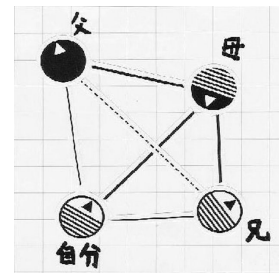


図4 家族イメージ法の例

(4) セルフモニタリング尺度 (表2)

家族紹介映像の撮影後に、記入してもらった。全25項目。5件法（「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」まで）。下位尺度名〈外向性〉、〈他者志向性〉、〈演技性〉

＜分析方法＞

- ・映像ビデオについては、(1) カメラ目線が主、(2) 相手の映像を見るのが主、(3) 視線が定まらない (不定)、(4) ディスプレイから目を逸らしている (逸視) の4種の被験者に分類した。また、紹介時間を算出した。
- ・家族機能測定尺度及びセルフモニタリング尺度については、それぞれの尺度考案者にならって採点した。
- ・家族イメージ法については、(1) 両親のパワー (2~10)、(2) 両親の結びつきの強さ (0~3)、(3) 被験者本人のパワー (1~5)、(4) 自分を家族に向けた割合をそれぞれ測度として用いることにした。

【結果】

視線行動のスタイルによる違いはいずれも統計学的に意味のある違いはなかった³⁾。しかし、これは、今回、探索的検討を簡便に行うため、視線行動に関する測度を4カテゴリーに割り切ってしまったためである可能性がある。時間や移動回数を量的変数とすることで今後の分析を進めていくことができよう。そのような分析によって可能性のある仮説を表3から抽出するならば、目を逸らしている時間の長さは家族機能測定尺度における数値の低さと関連する可能性があり、カメラ目線の長さは両親のパワーやつながりの強さ、さらにはセルフモニタリング尺度の高さと関連している可能性がある。あるいは、視線方向が不定とされた協力者たちは、視線の移動回数が多かったわけであるが、親のパワーやつながりの強さ、自分のパワーと負の相関を持っている可能性がある。また、視線の移動回数の多さは、セルフモニタリング尺度の演技性の低さと関連している可能性がある。

表3 視線行動のスタイルで分けた各測度の平均値 (最大値を太字、最小値を下線で示した)

映像からの測度			家族機能測定尺度		家族イメージ法				セルフモニタリング尺度			
視線行動のスタイル	紹介人数	紹介時間(秒/人)	凝集性	柔軟性	親のパワー	親の結びつき	自分のパワー	自分を家族に向けた割合	総得点	外向性	他者志向性	演技性
カメラ目線(N=14)	<u>3.6</u>	15.6	32.7	28.3	8.0	2.6	3.7	86%	78.1	31.4	38.4	11.6
相手の映像(N=16)	4.1	<u>12.2</u>	31.4	29.2	7.7	2.5	3.1	81%	<u>74.9</u>	28.9	<u>37.8</u>	11.3
不定(N=6)	4.3	15.9	30.8	27.3	<u>6.4</u>	2.4	<u>2.6</u>	80%	75.8	29.7	39.7	<u>8.8</u>
逸視(N=4)	3.8	22.5	<u>30.0</u>	<u>24.8</u>	6.8	<u>2.0</u>	4.0	<u>50%</u>	76.5	<u>28.5</u>	38.8	10.3

表4 各測定間の相関係数表

*両側 5%有意

**両側 1%有意

		家族機能測定尺度		セルフモニタリング尺度				家族イメージ法		
		凝集性	柔軟性	総得点	外向性	他者志向性	演技性	親の パワー	親の結 びつき	自分の パワー
測定 尺度	凝集性	-								
	柔軟性	.58**	-							
セルフ モニ タリ ング 尺度	総得点	-.11	-.26	-						
	外向性	.14	-.13	.75**	-					
	他者 志向性	-.27	-.27	.77**	.37*	-				
	演技性	.06	-.06	.62**	.78**	.31*	-			
家族 イメ ージ 法	親の パワー	.06	.22	.06	.06	.09	.10	-		
	親の結 びつき	.33*	.48**	-.03	.09	-.11	.12	.59**	-	
	自分の パワー	.11	.23	-.10	.02	-.33*	.11	-.09	.05	-

次に相関係数表を検討したところ(表4)、特筆すべき点は2点あると考えられた。1点目として、家族機能測定尺度の2つの下位尺度と家族イメージ法における両親の結びつきの強さの間に相関が見られた(スピアマンの順位相関係数による)。すなわち、両親の間のつながりを強いとみなしている協力者は、同時に家族の絆及び問題解決力における柔軟性を高く評価していることになる。柴崎(2000)がすでにこれらの相関を報告しているが、本研究においても追認される結果となった。2点目としては、セルフモニタリング尺度の他者志向性と家族イメージ法に自分のパワーの評価の間に負の相関が得られたことである。これも互いの基準関連妥当性が認められる結果となった。

ちなみに、尺度内の下位尺度間に相関が見られたことは、尺度構成上必ずしも妥当ではないが、現実にこれらの尺度については、相関が見られることが知られている(家族機能測定尺度について:草田, 1995; Hampson, Hulgus & Beavers, 1991. セルフモニタリング尺度について:岩淵・田中・中里, 1982)

最後にオルソンの円環理論にしたがって、視線行動スタイルごとに分けた(表5)。群分けは、平均値と標準偏差によって行われるため、草田・岡堂(1993)と比較したところ、十分に似た結果であったため、彼女らの群分け基準に従うこととした⁴⁾。その結果、視線が定まらない不定群のみ、他と著しい違いが見られた。すなわち極端群に割り当てられる確率が高くバランス群に割り当てられる確率が著しく低い可能性があった。ただし、表中の各セルに含まれる人数が少なす

表5 オルソンの円環理論に基づく群分け（単位：人）

	極端群	中間群	バランス群	合計
相手の映像	3 (19%)	5 (31%)	8 (50%)	16 (100%)
カメラ視線	1 (7%)	6 (43%)	7 (50%)	14 (100%)
不定	4 (67%)	2 (33%)	0 (0%)	6 (100%)
逸視	1 (25%)	1 (25%)	2 (50%)	4 (100%)

ぎ、統計学的検定にかけることはできなかった。しかしながら、今後、被験者数を増したり、視線の移動回数などを測度として採ることによって検討していく可能性を拓いたと言える。もっとも、本研究における「不定群」とは、単純に目がキョロキョロしているというだけではなく、どこを見ているのかははっきりしないという場合が含まれており、そのあたりの印象が、客観的測度によって妥当に表されるのかどうかは、今後の検討を待たねばならないだろう。

【考察】

本研究においては、家族の関係性と視線コミュニケーションの関係を映像、質問紙、図式投影法の各データから探索的に検討し、今後の方向性を探った。その結果、特筆すべき点を挙げるとするならば、家族機能測定尺度の群分けと視線行動スタイルのクロス集計表から、視線が定まらない群（不定群）の家族機能の極端さが浮かび上がったことであろうと考えられた。この点において、本研究は探索的検討としての意義を果たし得たと考えられる。

最後に、今後の検討を進める上で、なぜ家族の関係性が（家族を紹介しているときの）視線行動のスタイルに影響するのだろうかという点について仮説的な議論を行っておく。ひとつ考えられるのは、機能的に極端な家族の出身者は、家族についてまとめて語ろうとする時により多くの精神機能にアクセスする必要がある、ある精神機能から別の精神機能に切り替えねばならないことが多いため、それに伴って視線が移動しがちであるということである。もうひとつは、（話題に関わらず）機能の極端な家族においては、視線の持つ肯定的な機能（e.g., ゲイズ・グルーミング仮説）と否定的な機能（e.g., Ellsworth, Carlsmith & Henson, 1972）の混乱が生じてしまい、それが視線の定め方に影響してくるということである。あるいは、まず何らかのパーソナリティ特性にいったん家族の関係性が影響し、そこから、視線行動のスタイルに影響が生じるということである。

仮に、今後、家族機能と視線コミュニケーションの関係に対する実証的研究が進んでいけば、今後ますます機会の増すであろう遠隔映像対話、カウンセリング現場、虐待への対応、犯罪捜査における面接場面において、視線行動スタイルの印象がもたらす不要な判断をぬぐい去り、場合によっては、鑑別的手がかりを与えると行ったことも不可能ではないかも知れない。

【付記】

本研究は平成15年度岐阜聖徳学園大学短期大学部研究助成金によって行われた。協力してくれた学生のみなさんに感謝する。

【注】

- 1) 実際には、草田・岡堂（1993）では、凝集性と適応性という名称を用いている。しかし、「適応 (adaptability)」という概念は大変広く、実際の質問内容は、家族が封建的関係性に束縛されずに問題解決を行っているのかを問うているため、家族柔軟性という表現をよりわかりやすい用語として用いることとした。
- 2) ただし、このカーブリア仮説が検証されなかったと報告する研究群 (e.g., Green, Kolvezen & Vosler, 1985) もあり、結論は出ていない (詳しくは、草田, 1995)。
- 3) 紹介人数、親のパワー、親の結びつき、自分のパワーについては、Kruskal-Wallis 検定を用いたが、差はなかった (順に、 $\chi^2(3) = 2.3, 4.8, 2.6, 6.3, p = .51, .18, .46, .10$)。紹介時間については一元配置の分散分析を用いたが差はなかった ($F(3, 36) = 1.4, p = .25$)、家族機能測定尺度 (家族凝集性、家族柔軟性) とセルフモニタリング尺度 (外向性、他者志向性、演技性) については、分散分析 (反復測定) を行ったが、視線行動スタイルの主効果はいずれもなかった ($F(3, 36) = 1.1, 1.2, 0.4, 0.2, 1.2, p = .93, .54, .75, .88, .34$)。
- 4) 家族凝集性、家族柔軟性の順番に、草田・岡堂 (1993) が、31.99 (SD=7.00)、29.11 (SD=5.14) であったのに対して、本研究が、31.63 (SD=8.03)、28.15 (SD=5.47) であった。

【引用文献】

- Argyle, M. & Cook, M. (1976) *Gaze and mutual gaze*. Cambridge University Press.
- Argyle, M. & Dean, J. (1965) Eye contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304.
- Argyle, M. & Ingham, R. (1972) Gaze, mutual gaze and proximity. *Semiotica*, 6, 32-49.
- Carnes, P.J. (1987) *Counseling sexual abusers*. Mineapolis : CompCare Publications.
- Ellsworth, P.C., Carlsmith, J.M. & Henson, A. (1972) The stare as a stimulus to flight in human subjects: A series of field experiments. *Journal of Personality & Social Psychology*, 21, 302-311.
- Hetherington, E.M. (1972) Effects of father absence on personality development in adolescent daughters. *Developmental Psychology*, 7, 313-326.
- ハンフリー N. (1993) 垂水雄二 (訳) 内なる目－意識の進化論－ 紀伊国屋書店.
- Goffman, E. (1963) *Behavior in public places*. Free Press.
- Green, R.G., Kolvezen, M.S. & Vosler, N.R. (1985) The Beavers-Timberlawn Model of family competence and the Circumplex Model of family adaptability and cohesion : Separate but equal? *Family Process*, 24, 385-398.
- Hampson, R.B., Hulgus, Y.F. & Beavers, W.R. (1991) Comparisons of self-report measures of the Beavers Systems Model and Olson's Circumplex Model. *Journal of Family Psychology*, 4, 326-340.
- Hinchliffe, M.K., Lancashire, M. & Roberts, F.J. (1971) A study of eye-contact changes in depressed and recovered psychiatric patients. *British Journal of Psychiatry*, 119, 213-215.
- Hoffman, L. (1981) *Foundations of family therapy*. New York : Basic Books.

- 亀口憲治 (訳) (1986) システムと進化—家族療法の基礎理論— 朝日出版社
- 岩瀬千明・田中國夫・中里浩明 (1982) セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究 53, p53-57.
- 亀口憲治 (2000) 家族臨床心理学 東京大学出版会
- 亀口憲治 (2003) 家族のイメージ システムパブリカ
- Kendon, A. (1967) Some functions of gaze direction in social interaction. *Acta Psychologica*, 26, 22-63.
- Kendon, A. & Cook, M. (1969) The consistency of gaze patterns in social interaction. *British Journal of Psychology*, 60, 481-494.
- 木村駿 (1982) 日本人の対人恐怖 勁草書房
- Kobayashi, H. & Koshima, S. (1997) Unique morphology of the human eye. *Nature*, 387, 767-768.
- 草田寿子 (1995) 日本語版 FACESⅢの信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究 28 (2), p154-162.
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993) 家族関係査定法 岡堂哲雄 (編) 心理検査学 垣内出版 p573-581.
- レイン R.D. & エスターソン A. (1972) 笠原嘉・辻和子 (訳) 狂気と家族 みすず書房
- 増田彰則・山中隆夫・武井美智子・平川忠敏・志村正子・古賀靖之・鄭忠和 (2004) 家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について 心身医学 44 (12), p903-909.
- 西出隆紀・夏野良司 (1997) 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究 45 (4), p456-463.
- Olson, D.H., Sprenkle, D.H. & Russel, C.S. (1979) Circumplex model of marital and family systems: I. Cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications. *Family Process*, 18, 3-28.
- Olson, D.H., McCabbin, H.L., Larsen, A., Muxen, M. & Wilson, M. (1985) *Family Inventories*. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.
- 小沢哲史 (2002) 社会的参照現象における養育者の能動的役割 平成13年度 東京大学大学院総合文化研究科 博士学位論文.
- 小沢哲史 (2005) 社会的情報収集行動の起源と発達～他者の目を通して世界を知ること～ 読む目・読まれる目 東京大学出版会 p139-156.
- Rubin, Z. (1970) Measurement of romantic love. *Journal Personality & Social Psychology*, 16, 265-273.
- 柴崎暁子 (2000) 親と子の家族機能の認知と精神病理. 東京大学修士論文
- Snyder, M. (1974) The self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- Walden, T.A. (1991) Infant social referencing. In J. Gerber & K. Dodge (Eds.), *The development of emotion regulation and dysregulation* (pp. 69-88). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Walden, T.A. & Knieps, L. (1996) Reading and responding to social signals. In M. Lewis & M.W. Sullivan (Eds.), *Emotional development in atypical children* (pp. 29-42). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.